
魔法少女リリカルなのはvivid 聖杯を宿す者

五胡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはvivid 聖杯を宿す者

【Nコード】

N2196Y

【作者名】

五胡

【あらすじ】

これはとある事故で四年間眠り続けた男の娘の物語。目覚めた瑞稀を待っていたのは同じクラスの霸王と可愛い後輩の聖王だった。

幾多の殺し合いをして来た瑞稀は何をおもつか？

魔法少女リリカルなのはvivid 聖杯を宿す者………始まります。

プロローグ 目覚める聖杯

ナカジマ家

何故こうなった？

つーか帰りたい……帰る所が無いけど……。

俺の目の前には女性。

死にたい……鬱だ……どうしてこうなったかと言つと……

一時間前……ミッドチルダ某所の病院の一室。

此処には女のような少年が眠りについていて、
そんな病室に不釣り合いな男が訪ねてくる。

「今日も眠ってるのか……何時になったら目覚めるんだろうな……祐
一とサキのお姫様は」

彼がいった祐一とサキというのは病室で眠っている少年の両親だ……
…因みにもう既に他界している。

彼の名前はゲンヤ・ナカジマ……祐一とサキとは親友の間柄で階級

は三佐で陸士108部隊の部隊長をやっている。

「今日も駄目か……早く起きろよな」

そう良いながらゲンヤは少年の頭を撫でる。

「ん……………」

「!?」

「あれ……………ゲンヤさん？」

少年が起きてエメラルドの様な澄んだ緑の瞳がゲンヤを見る。

「iiiiiiiiiiiiiiii」

「い？」

「医者ー！」

ゲンヤの叫びに看護婦達のはしって来て少年が目覚めた事を知ると
急いで精密検査を開始した。
結果問題はなかった。

「えーと？」

「状況が、飲み込めねえみてえだな」

「まあ」

「お前はある事件に巻き込まれて眠ってたんだ」

「眠ってた……具体的にはどの位？」

「……………」

ゲンヤは無言でゆびを四本立てる。

「四日？」

「ちげえ」

「ええ、四十日!？」

「其れも違う……四年だ!お前は四年間寝てたんだ!」

「はい?」

少年は余りに突拍子もないゲンヤの言葉に首を傾げた。

「信じられねえのもしようがないが事実だ……あの事故に巻き込まれて生きているのも」

「じゃあ、父さんと母さんも……」

「ああ、もういない」

「そうですか……」

「まあ、いきなりで驚いたと思うが……」

「い、いえ」

「とりあえず、俺の仕事が終わったら話そうぜ」

「はい!」

「んじゃ、行くぞ」

とまあ、こんな感じで此処に来ただけど誰?…ギン姉でもスバ姉でもない…かんべんしてくれ。

「えっと君…名前は?」

俺はゲンヤさんの後ろに隠れる。

「おい！」

「無理です！ 知らない女性ひとじゃないですか!？」

とゲンヤさんに言つと

『しつかりなさい、瑞稀！ こんなの芋か南瓜と思いなさい』

と耳元から声が聞こえた。

「お前さん……そりゃあ」

「デバイス？」

「本当ツス！」

「お姉様、何で!？」

「「お姉様!？」」

『貴方達……煩くてよ！ 瑞稀：わたくしは貴方の半身…貴方がいるなら何処にでも行きますわ』

「お姉様……」

『ともかく、自己紹介くらいなさい』

「はい、お姉様」

俺はお姉様の指示に従い自己紹介をする。

「天地・瑞稀です、宜しくお願いします」

「私はデイエチ・ナカジマ、宜しく、瑞稀ちゃん」

「私はウエンディ・ナカジマツスよろしくツス、瑞稀ちゃん」

『デイエチ、ウエンディ…貴女達なにか勘違いしてますわ、瑞稀は男…ちゃんではなく君ですわ』

「「おおおお、男の子!？」」

「ああ、瑞稀のデバイスの言う通りだ」

何を驚いてるんだ？

俺が男だとだめなのか？

「瑞稀：仕事が終わったら話そうぜ……それまで仲良くな」

「はい」

ゲンヤさんは仕事に行った。

「ねー、ねー、瑞稀、新聞なんか読んで楽しいんツスカ？」

退屈なのか、ウエンディさんが聞いてくる………ディエチさんは読書中。

「楽しいですよ………少なくとも俺が寝てる四年の間に色々変わってるみたいですから」

「そうゆうもんツスカね、ディエチ？」

「ウエンディ………嫌い」

「酷いツス、つまらないツス、退屈ツス、2人もと楽しそうで狡いツス！」

ウエンディさんが駄々を捏ね始めた………あっ！

デイエチさんの額に青筋が……

Bannon

デイエチさんはウエンデイさんを本の角で叩いた。

「ウエンデイ……嫌い…私、自分の部屋に行く」

あーあ、デイエチさんは部屋に行っちゃった。

「ウエンデイさん？」

「うつつ、酷いッス」

泣き始めたよこの人……これ如何するの？

「何なら出かけますか？」

「本当ッスか!？」

「俺も街がどれだけ変わったか興味がありますからね」

「なら早く行くッス」

何だろう……この人、泣いたり、笑ったり忙しい人だな。

ミッドチルダ市街地

「おお、新発売のお菓子ツス！」

ウエンディさんと買い物に来たのだが何でこの人……お菓子しか見ないんだろ？

服とかアクセサリーとか見ないんだらうか？

「瑞稀は買うもの無いんスか？」

「無いですよ、おれは宝石を見れば十分ですから」

「宝石？」

「はい、魔法に使うので」

「魔法で使う？」

そんな話をしながら雑貨屋の前を通ると……………

「あつ、ちよつと待ってツス！」

ウエンディさんが雑貨屋に入って行った。
そして

「お待たせツス」

ウエンディさんは髪留め用のゴムを持っていた。

「ほら、瑞稀……動いちゃ駄目ツス！」

ウエンディさんは俺の髪をポニーテールにする。

「……………」

ウエンディさんは固まっている。

「ウエンディさん、どうしました？」

「な、何でも無いッス」

(だ、駄目ッス…ポニテにしたのは間違いッス……………凄いイケメンになったッス…眩し過ぎて直視できないッス)

ウエンディさんどうしたんだろ？

何かブツブツ言ってるし…てか危ない。

ウエンディさんは階段を踏み外す。

俺は其れを抱きとめる。

かあっ……………

ウエンディさんの顔が真っ赤になった？

「ウエンディさん、大丈夫ですか？ 顔が真っ赤ですけど？」

「あははは、ちょよ、ちょよと暑いだけッス」

(だ、駄目ッスよ、今のは駄目ッス、理性が飛びかけたッス……………この子は本当に中学生なんスカ？……………華奢ッスけど…ついてるもの、ついてるし…良い匂いだし…反則ッス！)

「と、ともかく、もうお昼だし……………ご飯を食べに行くッス！」

「えっ！？でもお金もってない」

「大丈夫ッス、瑞稀一人なら何とかなるッス」

ノーヴェ、チンクサイド

「なあ、チンク姉、あたし達は何をしてんだろ？」
「姉には妹の恋愛を見守る義務がある！」

チンクとノーヴェはたまたま、瑞稀とウエンディを発見してつけていた。

恋人同士だと勘違いしたらしい。

「あ、抱き合った」

「な、何と！？こんな所で大胆な！」

「つか、恰好良いな、ウエンディの奴…何処で知り合ったんだろ？」

「む、確かに気になるな」

「あの2人……ファミレスに入った」

「姉達も行くぞ、ノーヴェ」

「ウエンディさん……如何したんですか？」
「な、な、な、何でもないツス！」

いや、さつきから凄い挙動不審なんですけど？

「み、み、瑞稀……お願いがあるっス」

「はい？」

「私にあぐんして欲しいツス！」

は？

何を言ってるんだこの人？

『瑞稀……良いのではなくて？』

まあ、お姉様もそう言ってるし良いか。

「はい、あぐん」

「あぐん」

みるみる顔が真っ赤になっていくウエンディさん……恥ずかしいならしなきゃ良いのに。

「お待たせしました……メロンクリームソーダになります」

あり？

二つ頼んだのに何で一つ？

っーかデカ！？

何かハートのストローが刺さってる。

何だろう……この店は同じ物を2人で頼むと一つにするんだろうか？

っーか……これは恋人同士のサービスだよね？
ウエンディさん何か口をパクパクしてるぞ。

（やってしまったッス……此処のお店は恋人同士のサービスが充実してるお店だったッス……如何するッス……あれを飲めと……でも瑞稀はわかってなさそうだし……だ、大丈夫ッス）

「ほ、ほら、瑞稀……のののの飲むッス！」
「はい」

（瑞稀の顔が近いッス……ああ、もうメロンソーダの味なんてわからないッス……あわあわあわあわ）

大丈夫か、ウエンディさん……プルプルしてるぞ……爆発するんじゃないのか？

「ウエンディさん……御手洗いにいってきます」
「わわわわ分かったッス」

チンク&ノーヴェサイド

「何か虚しくなって来た」
「姉もだ」

「あ〜ん……か……良いな」
「ほう、ノーヴェはあ〜んがしたいのか？」
「ちちちち、違う」

「動揺する所が怪しいな……姉はあのドリンクが良いな」
「ち、チンク姉」

ん？

何か騒がしいな？

ウエンデイさんが絡まれてる？

「姉ちゃん……如何してくれんだよ、俺の一張羅をよ！」

「ごめんなさいッス」

「謝って済めば管理局はいらねえんだよ！」

「やれやれ、小さなシミ如きでなにを騒いでるの？」

「ああ？ テメエ誰だよ？」

「瑞稀、辞めるッス！」

「この姉ちゃんの連れか……上玉じゃねえか」

俺の肩においた下衆の手を掴み投げ飛ばす。

『下衆如きが瑞稀に触れるんじゃありませんわ！』

「テメエ」

ウザいなこいつ……俺は人差し指を向ける。

「ガント（弱）」

人差し指から黒色い球が出て男に当たる。

「んだよ、痛くも痒くもねえぞ」

ギョルルルルルルル

「は、腹がいてえ、き、気持ち悪い……うえええ」

俺は男が吐く前にウエンディさんを目隠しして会計に向かう。
其れにしてもガントって直接的なダメージないとああなるんだ……
知らなかった。

その後もウエンディさんとボーリングしたり、カラオケしたり、ゲーセンに行ったりした。

家に帰る頃には大量のぬいぐるみが……冬木のゲーセンマスタ
ーと呼ばれた俺に取れない物はないのだ……この世のゲーセンは俺
の物……いけない、ギル様みたいになるところだった。

「いっぱい取れたツス」

「喜んでもらえて良かったよ、ウエンディ」

何故かウエンディに呼び捨てでと言われたのでウエンディとよんで
いる。

「ただいまツス」

ウエンディさんが言うのと懐かしい顔がいた。

「お帰りなさい、ウエンディ、瑞稀」

「ギン姉、久しぶり」

「ええ、本当に四年ぶりね」

その夜

「何だウエンデイの彼氏じゃなかったのか？」

「違うツスよ、ノーヴェ」

「ウエンデイ……狡い！」

「デイエチは自分で部屋に行ったじゃないスカ！」

驚いた、四年の間に姉妹が増える。

ギン姉とスバ姉、ウエンデイ、デイエチさん以外にもノーヴェさんとチンクさんがいた。

凄いな6人姉妹なんて……みんな綺麗だから海に行ったらナンパされまくりだろうな。

「如何した……瑞稀？」

考え事をしてたらチンクさんに質問された。

「いや、みんな綺麗だから海に行ったらナンパされまくって泳げないなあって」

「はあ？」

「相変わらずね、瑞稀」

何で呆れてんの？

「お前さんらしいな……こいつ等の水着姿を想像するんじゃない
ナンパを最初に想像するとはよ」

「水着姿って言われてもギン姉とスバ姉のしか見たことないし」

「いや、想像だよ」

俺はゲンヤさんの肩に手をおく。

「良いですか…ゲンヤさん……想像するのはかならず美化する物で
す…そんな物には頼ってはいけません…元々綺麗な物を美化するな
ど愚の骨頂です！」

『何かギルが言いそうですわね』

俺の演説にお姉様が突っ込む。

ナカジマ姉妹は……………

「そんな綺麗なんて」

ギン姉は何時も通り照れてくねくねしている。

「姉は綺麗……………」

チンクさんは自分の世界に突入。

「私……綺麗」

デイエチさんは頬を染めて俯いている。

「ば、馬鹿野郎！ き、綺麗なんて言われても、う、嬉しくなんか
ないんだからな」

第二話 苦悩する聖杯と霸王と聖王（前書き）

なんにもない空間……？

突如…目の前にクラシッくな二丁拳銃を持った、顔に大きな傷のある女性が現れる。

「あんだけ立派に悪党やったんだ、この死に方だつて贅沢つてなもんさ、愉しめ、愉しめよシンジ、そしてアンタらも容赦なく笑つてやれ、ピエロつてのは笑ってもらえないと、そり、哀れなもんだからな……さて、ともあれ、よい航海を、次があるなら、アタシより強くなつていてくれよ？アタシや本業は軍艦専門の海賊だからねえ、自分より弱い相手と戦うつてのは、どうも尻の座りが悪くていけない」

これは……………

次に出で来たのは緑の衣装に身を包んだ瘦躯の男性。

「……だから、謝る必要なんかねえんだ、十分、いい戦いだつた、恥じるところなんかどこにもねえ……いやあ、そもそも戦いなんて上等なもん、オレに出来るとは思わなかった、思えば、生前のオレやあ、富も、名声も、友情も、平和も、たいていのものは手に入れたけどさ、それだけは、手に入れる事ができなかった　だから、いいんだ……最期に、どうしても手に入れられなかったものを、掴ませてもらったさ　」

止め

次は黒い少女

「わすれちゃったの？ こう言うの、あわれで可愛いトミーサム、いろいろここまですご苦労さま、でも、ぼうけんはおしまいよ、だってもうじき夢の中、夜のとばりは落ちきった、アナタの首も、ポトンと落ちる、さあ　　嘘みたいに殺してあげる。ページを閉じて、さよならね！」

止め、止めるおおおおおおお！

俺は絶叫と共に起きた。

第二話 苦悩する聖杯と霸王と聖王

ナカジマ家

何時も通り……いや、瑞稀がいる分…会話が弾む筈なのだが

「……………」

誰1人として口を開かない。

理由は朝の絶叫………全員が駆けつけたのだが…瑞稀は顔を真っ青にし震えるながら謝っていた………俺が生き残ってごめんなさい、殺してごめんなさいと………。

其れを聞いた全員は何も言えなくなり、この状況を作り出していた。

「いってきます………」

「あ、うん、気をつけてね」

瑞稀が行ったあとナカジマ家は会議になった。

「昨日は明るかったのに」

ギンガが口を開く。

「見た目はアレでもまだ子供だ………両親の死が答えているのだろうか？」

チンクが冷静に意見を述べる。

「其れにしては謝り方が変だった」

「ああ、生き残ってごめんなさいは分かるが殺してごめんなさいが
わかんねえ」

チンクの意見を否定するデイエチとノーヴェ。

「わからない事……だらけッス」

そう言って落ち込むウエンデイ。

「まあ、しゃあねえ、あいつが自分から話してくれるのを待とうぜ」

ゲンヤの言葉でこの会議は終わった。

St・ヒルデ魔法学院

アレの夢を見るなんて……ここ最近ずっと見てなかったのに……

俺が見たのはムーンセルでの聖杯戦争を脱落したマスターとサーヴ
アントの最後。

みな、俺とセイバーが殺したのだ
……100人以上のサーヴァントとマスターがどんな願い事も叶えてくれる願望器【聖杯】を手に入れるための殺し合い……それが聖杯戦争。
聖杯を手に入れるのは最後まで生き残った一組だけ……だからこそ殺し合う。

「瑞稀君、瑞稀君！」

「あつ、はい！」

「自己紹介してくれるかな」

「すみません、天地 瑞稀です、よろしくお願いします」

如何やら聖杯戦争を思い出してる間に俺の自己紹介までいってしまったらしい。
やれやれ鬱になりそうだ……。

「じゃあ、瑞稀君の席はアインハルトさんの席の隣ね……アインハルトさん、瑞稀君……まだ教科書がないから見せてあげてね」

「はい……」

返事をしたのは右目が紺、左目が青で微妙に色が違うのと、碧銀の髪の色に付けた大きな赤いリボンが特徴的な女の子だった。

「あ、あの」

「ん？」

「アインハルト・ストラトスです」

「天地 瑞稀……よろしく」

其れから会話はなく授業中も教科書を見せて貰うだけだった。

昼休み

「あ、あの」

「何かな？」

「お、お昼……一緒に如何ですか？」

「お昼……」

「食べないとお腹空きますよ……午後は体育ですから……購買の位置も去年変わりましたし……」

「案内してくれるの？」

「は、はい」

「ありがとうございます……アインハルトさん」

「いえ」

俺はアインハルトさんに購買へ連れてってもらい中庭でパンを食べていた。

「……アインハルトさん」「」

金髪で赤と緑の虹彩異色の女の子とツインテールの女の子、八重歯が特徴的な女の子が走って来た。

「ヴィヴィオさんに、コロナさん、リオさんまで如何したんですか？」

「みんなで本堂に行く途中なんです……そしたらアインハルトさんの姿が見えたから」

「一緒にどうですか？」

どうやら三人はアインハルトさんを本堂に連れて行きたいらしい。
すると八重歯の子と目があった。

「あれ？どなたですか？」

「俺は天地 瑞稀……小2から入院しててね、昨日退院したから今日から四年ぶりに通ってるんだよ」

「へーそうなんですか……わたしはリオ・ウェズリーです、よろしく
お願いします、先輩」

「あつ、わたし高町 ヴィヴィオです」

「わたしはコロナ・ティミルです」

「よろしくね、リオ、ヴィヴィオ、コロナ」

「……はい！」「」「」

元気な娘達だな。

「あの、瑞稀さんは小2から学校を休んでたんですよね」

「そうだけど？」

「瑞稀さん、男の人ですか？」

「そうだけど？」

凄いな、この子達、俺がオトコって良く分かったな。

「あの、緑銀の神子しんこに心当たりは？」

「その呼び名をどこで？」

緑銀の神子……俺が事故に巻き込まれる前にシスター達がつけた二
つ名だ。

「やっぱり」

「本物だ」

「綺麗」

「本人に出会えるなんて光栄です」

アインハルトさんまでそつち側なのね。

その後、ヴィヴィオ達の押しもあり全員で本堂に行った。

結局、ヴィヴィオ達はお祈りをしたかったらしい。

俺も久方ぶりにするか。

「私が殺す。

私が生かす。

私が傷つけ私が癒す。

我が手を逃れうる者は一人もいない。

我が目の届かぬ者は一人もいない。

打ち砕かれよ。

敗れた者、老いた者を私が招く。

私に委ね、私に学び、私に従え。

休息を。

唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる。

装うなかれ。

許しに報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を。

休息は私の手に。

貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。

永遠の命は、死の中でこそ与えられる。

許しはここに。

受肉した私が誓う。

“この魂に憐れみを（キリエ・エレイソン）”

ん？

何故……ヴィヴィオとアインハルトが泣いてる！？

「何だか悲しくもないのに涙が」

「すみません」

何なんだ一体。

放課後……俺はアインハルトさんに誘われヴィヴィオ達の練習に付き合うことになったのだが……ノーヴェさんが先生とは驚いた。

「やるな」

俺は現在ヴィヴィオとノーヴェさんのスパーを見ている。

『瑞稀はやりませんか？』

「お姉様……俺はちよつと」

『なまりますわよ？』

「うっ」

お姉様に痛い所を突かれた。

「あ、あの、瑞稀さん……わたしと戦ってもらえませんか？」

アインハルトさんに勝負を挑まれた。

「良いですよ」

俺とアインハルトさんはお互い向き合う。

「……………始め！」

ノーヴェさんの声と共にアインハルトさんが動く。

離れた距離から一瞬で接近し、左右の拳で連撃を繰り返して来る。

俺は掌に「魔力」を集め、相手の攻撃を受けながら技を打ち込む。

「桜楼月華」

「!?!」

アインハルトさんはうまく防いで距離を取った。

(何…いまの？ あの短時間にそこまで魔力を溜めれる筈がないのに……………凄い威力だった)

「やはり……………強いですね、瑞稀さん！」

「いや、俺の格闘技能なんて……………ムーンセルのアサシンに比べれば赤子さ」

そうやってアインハルトさんとの距離を詰めて俺は拳の連打を浴びせる。

アインハルトさんはそれを捌きながら再び距離を取る。

(凄い…拳の一つ一つが凄い威力…こんな人がいるなんて)

何故かアインハルトさんは突っ込んでくる。

「駄目だよ…其れじゃ」

俺はアインハルトさんにラッシュをかける

(全てが私より上…しかも瑞稀さんは格闘タイプじゃない!?)

何を考え……ってしまった!!

(其れでもこの技なら…!!)

アインハルトさんは俺が見せた一瞬の隙を突き懐に潜り込む。

「霸王…」

アインハルトさんはそのまま足先から力を練り上げ、

「断空拳!!」

俺の鳩尾に拳を打ち込む。

「つう」

俺は派手に吹き飛んだ…こんな相手なら使つか、アサシンの拳。

「それでは……しばし気を納めるか」
「!?!」

瑞稀が構えた瞬間に悪寒がはしった。
そして

「いない？」

アインハルトの視界から瑞稀が消えた。
そして

「どこを見ている？」

「!?!」

(いきなり現れた!?)

アインハルトは急いで手を交差させガードする。

「我が八極に二の打ち要らず无二打！」

瑞稀はガードするアインハルトに強烈な一撃を打ち込む。
其れによってアインハルトの意識を刈り取った。

「……あ、アインハルトさん!」「!」

ヴィヴィオ達は駆け寄り、瑞稀は深呼吸している。

「大丈夫だ……意識を刈り取っただけだからな」

(何だ…今の変わり様は……其れに意識を刈り取ったって……どん

だけの實力だよ！ アインハルトはガードしてたんだぞ！ 其れを抜くなんて……でもこいつは四年間寝てたんだよな……何時どこでこんな技能を覚えたんだ？)

ケロつと真顔で言う瑞稀に対してノーヴェはそう思った。

第三話 聖杯の秘密と家族（前書き）

この話はヴィヴィオとアインハルトの出会ったすぐ後からスタートします。

第三話 聖杯の秘密と家族

ナカジマ家・夕食

「アインハルトと戦った!？」

「ノーヴェ…何で止めなかったツスカ!? 瑞稀、怪我はないツスカ!?」

「落ちて着けデイエチ、ウエンディ、怪我があるのは寧ろアインハルトの方だ……」

「え? どう言うこと?」

「其れがアインハルトの奴、瑞稀の一撃を受けて全身打撲だ……」

ナカジマ家の夕食時、ノーヴェは今日の事をみんなに話していた。そんな中もくもくと食べている瑞稀。

『瑞稀：少しは反省なさい……：よりもよってアサシンの無二打を使うなんて……：アレはアサシンが貴方のセイバーを倒す為に使用した殺人技をですわ……：其れをか弱い女の子に使うなんて……：』

「お姉様…霸王の血族にか弱いは失礼だよ」

『霸王だろつが、聖王だろつが、冥王だろつが、一緒ですわ!』

「でも霸王クラウスだけが男で聖王オリヴィエと冥王イクスヴェリアは女の子だったよね」

『強さがイカれるから同じですわ』

「うわっ、酷いなお姉様」

その会話を聞いたノーヴェが瑞稀に聞く。

「瑞稀：イクスヴェリアを知ってるのか?」

「友達だけど?」

「そっか……：明日、あたしと教会に行こう!」

「急にどうしたの、ノーヴェさん？」

「お前のそのデバイス……赤い剣で正式名は原初廻火・闇だろ？」

『貴女…何故わたくしの名を知ってますの？』

「イクスヴェリアに聞いたんだ…夢の中で親友がいたって……女の様な男とお姉ちゃんって呼ばれてるデバイスの話を」

『成る程……あの子が』

「と、言う事は俺のした事も分かってますよね」

「ああ」

「それじゃ、お世話になりました」

「待てよ！」

「離して下さい、ノーヴェさん」

ノーヴェは思いっきり瑞稀を抱きしめる。

「何でも一人で抱え込むなよ、馬鹿……あたし等は家族だろ」

ノーヴェの言葉で瑞稀はとある助成の言葉を思い出す。

《余は、優しい者は好きだ、その涙は美しくはないが、胸を打つ……
…そうだな、うまく言えないのだが、今回の戦いで余はそなたが少し好きになった感じだ……それでよい、よいか、より強い願いが生き残るのではない、より美しい願いが生き残るのだ、そなたの願いが小さく、今は見えずとも、最後まで残った願いは、何よりも美しく咲くものだ……故に、今はただ勝ち続けるがよい、答えはおのずと付いてこよう》

ムーンセルに召喚され……右も左も分からない瑞稀を支えてくれた
最高の相棒パートナーその名を

「……………セイバー……………」

瑞稀はポツリと名を呼びノーヴェの胸の中で泣きじゃくった。

「おとーさん、瑞稀…寝てるよ」

あのまま瑞稀は泣きじゃくり寝てしまった。

ベットに寝かせてきたノーヴェの手には瑞稀のデバイスが握られていた。

『では、説明しましょう…あの子の過去を……わたくしのはリイと呼びなさい』

この後、リイは語り出した。

霊子虚構世界「SE・RA・PH^{セリン}」と呼ばれる仮想現実世界を舞台に、聖杯【ムーンセル・オートマトン】を巡って、マスターと歴史

のデータベースから呼び出されたサーバントが共に戦いを繰り広げる。

深海をモチーフとした、コンピュータによって確立された仮想現実の世界にアクセスするのは、ハッカーたる128人のマスター。それぞれに与えられるのは、実在したか否かを問わず歴史に記された過去の英雄たるサーバント。

聖杯は己が担い手たるを選ぶために厳然たるルールを敷き、トーナメントによって殺し合い勝者を選ぶ。

「殺し合い……………」

「其れも生き残れるのはたった一人だけ……………」

「何だその、ルールはイカれている!!」

『貴女達がどれだけ騒ごうとも事実は覆りませんわ……………瑞稀が勝者であり……………生き残るのにそれだけの命を犠牲にしたと言つ事実は……………そしてイクスヴェリア達に会つたのも此処ですわ』

リリイの話を聞いたナカジマ家は絶句する。

瑞稀が寝ている四年間どれだけ過酷で辛い日々だったかを聞かされて……………。

「其れで結局聖杯とは何なんだ?」

チンクがリリイに聞く。

『聖杯とは願望器ですわ』

「願望器?」

『分かりやすく説明するなら……………何でも願いを一つ叶えてくれる……………魔法のアイテムですわ』

「成る程な……………そりゃ、殺し合う価値もあるわな」

「お父さん！」

「ギンガ……おめえはクイントに生き返って欲しいと思った事はねえのか？」

「それは……あるけど……人を犠牲にしてなんて間違ってる！」

『そうですわね……でもギンガ……全ての人間が貴女の様な考えではありませんわ……寧ろ人を蹴落とし犠牲にし、権力を欲する……』

…そう言う輩の方が多いのですわ……理屈ではありませんの』

「そう考えると瑞稀の奴も被害者だわな、望まねえ戦いを強いられて生き残っちまったんだからな」

「お父さん！そんな言い方！」

「そうは言つがお前等は瑞稀と同じ状況で耐えられるのか？ 少なくとも俺には無理だ！」

ゲンヤの言葉に一同は言葉を失う。

「でリリイ、彼奴はなにを望んだんだ？」

『力ですわ』

「力？」

『ええ、大事な者ができた時どんな事からも守れる様に……二度と大事な者を失わなくて済む様に……そして作られたのが私ですわ……それと同時にあの子は無限の魔力を手に入れましたわ……そして……次に飛ばされたのが』

その杯を手にした者は、あらゆる願いを実現させる。

第五次聖杯戦争。

最高位の聖遺物、聖杯を実現させるための大儀式。

儀式への参加条件は二つ。

魔術師であることと、聖杯に選ばれた寄り代である事。

選ばれるマスターは七人、与えられるサーヴァントも七クラス。
聖杯は一つきり。

奇跡を欲するのなら、汝。

自らの力を以って、最強を証明せよ。

「また……聖杯戦争だと!？」

『ええ、わたくし達はイレギュラー、死人が出ない様に暗躍しましたわ……最終的には仲間ができましたが……それまでは一人きり……幾度となく、死にかけましたの』

「あの野郎……そんな人生を」

「まだ、中学生が背負うには重すぎる」

「そんな人生だったなんて知らなかったツス」

『そう、だからこそ、あの子は力を求める自分のたいせつな人達を失わなくて済む様に……もう、誰の悲しみも見たくないから……それが出来るのであれば自分自身は厭わない……それがあの子の今ですわ』

「そんなのって」

「はっ、まだ、中坊なのにゴチャゴチャ考えやがって親に似たのかね」

「お父さん？」

「俺は決めたぞ、瑞稀の奴を全力で支えてやらあ……彼奴はもう俺の息子だからな!」

「そうよ、昔から手のかかる弟みたいなものだったし」

「そうだな……弟も悪くない」

「おねーちゃんとして頑張る」

「あつたりめーだ! まだ中学のガキに守ってもらうかよ!」

「瑞稀は絶対守るツス!」

翌朝

ん？

何だ重い！？

何だ…この状況は？

ナカジマ姉妹が全員俺のベットに寝てる……チンクに至っては俺の上で寝てる。

『瑞稀……ご機嫌よう…説明が欲しいかしら』

「お姉様…是非」

『瑞稀をナカジマ家で守るを体現した物……らしいですわよ？』

俺を守る？

アレを聞いてそう言う答えになるか普通？

「大丈夫よ、私達が守ってあげるから」

「姉に任せておけ」

「おねーちゃん…頑張るから」

「一人で抱え込んでんじゃねえぞ」

「私に任せておくッス」

大層な寝言だね。

まあ、守られるのも悪くはないか？

『瑞稀……何処に行きますの?』
「麗しのお姉様方の朝食を作りに……それとみんな……寝たふり
下手過ぎ」

そう言っつて俺は部屋を出てキッチンへ向かう。

瑞稀の部屋

『だ……そうですわよ……みなさん?』
「ああ、恥ずかしい」
「気付いてたのか」
「顔から火が出そう……」
「だったら初めてから言えよ!」
「瑞稀は意地悪ッス〜!」
『まだまだ、瑞稀の方が上手ですわね』

これがナカジマ家と瑞稀が本当の家族になった瞬間だった。

キャラクター紹介（前書き）

この子はサーヴァントでもやっついていけそうな気がする。

キャラクター紹介

名前

あまらち
天地・みずき
瑞稀

年齢

13歳

瞳の色

通常はグリーンだが、感情が昂ぶるか自己封印・暗黒神殿の封印を解いた時は右が金で左が真紅

髪の色

銀

性別

男

容姿

男の娘

性格

余り細かい事は気にしないタイプ

魔力値

自己封印・暗黒神殿によりD

好きなもの/事

オルタ

嫌いなもの/事
大事なものを傷つける奴。

一人称
私

他人称
年下と同じ年は愛称、年上はさん付け

魔力光
漆黒

レアスキル
風王結界

【インビジブル・エア】
刀身に幾重にも風を纏わせ、光の屈折率を変えることで不可視の剣と為している。
敵に武器の形状・間合いを把握させることのない、単純にして効果の高い術である。

なお、この風はオルタの切れ味をも強化している。

燕返し

【つばめかえし】
対人魔剣。
最大捕捉・1人。

相手を三つの円で同時に断ち切る絶技。
アサシンにより伝授された回避不能の必殺剣。

魔力放出

【まりよくほうしゅつ】

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって、能力を向上させる。

能力開放時は膨大な魔力が瑞稀が意識せずとも、濃霧となって体を覆う。

妖精眼

【グラムサイト】

瑞稀の左目。

神代の魔法使い達が持っていたとされる最高レベルの伝説の魔眼発動時に魔力の流れと魔物の「全て」を見ることができ、力を封じた状態でも魔物の感情ぐらいなら分かる。

劫の眼

【アイオンのめ】

瑞稀の金色の右目。

ゾロアスターの魔術師によって、人の世のすべてを視るために造られた虚ろなる神器。

未来視の能力を有するが、その真価は数多ある未来の可能性の中から望む未来を引き寄せ、どんな小さな可能性であってもその未来を掴むこと。

また、劫の眼は所有者の死後、所有者の魂を飲み込み、別の人間に転生する。

ヴェラードの他にも、イスカンダル有角王、剣士や高位の陰陽師など数千人が劫の眼に連なっていて、更にはこの世の果て、すべてを見るまで続いていく。

パラメータ

通常時

筋力 C + 魔力 D

敏捷 B + 幸運 C
耐久 B + 宝具 EX

開放時

筋力 A + 魔力 EX
敏捷 A + 幸運 C
耐久 A + 宝具 EX

人物紹介

本作の主人公。

小2の時にとある事故により意識をムーンセルに飛ばされ聖杯戦争を最後まで勝ち残った。

そのため、聖杯を手にし人の身でありながら人ならざる魔力を持ち合わせる。

その後、冬木市に飛ばされ第五次聖杯戦争に巻き込まれるが生き残る。

そして冬木市で生活していたが意識が戻り元の世界へと帰るが両親は既に他界していた。

なお、近距離戦闘はセイバー、アサシン、真アサシン、ランサー、バーサーカーに魔法戦闘はキャスターとリンに遠距離はアーチャーとギルガメッシュに鍛えられていたため同年代では恐らく最強である。

魔法は聖杯式でムーンセルと第五次聖杯戦争のサーヴァントの宝具を剣技と魔法で再現している。

なお、冬木の女性陣のせいで女性なれしている。

使用デバイス名

アエストゥス エストゥルタ
原初廻火・闇

愛称

普段はお姉様、展開時はリリイ

待機時の形態

右耳のイヤリング

展開時の形態

赤セイバーの剣【隕鉄いんてつ乃鞆のふいし】

バリアジャケットのデザイン

セイバーオルタ

術式

聖杯式

デバイスの性格

お嬢様

デバイス紹介

ムーンスセルの聖杯戦争の時のパートナーであるネロの隕鉄いんてつ乃鞆のふいしそっくりのデバイス。

瑞稀の望みで生み出された物。

冬木市では異常な能力から宝具指定を受けていた。

その能力とはサーヴァントの宝具を剣技・魔法として習得出来るというものである。

性格は瑞稀には甘く他人には厳しい。

愛称はリリイ自身が決めたもの。

技

無手

紅蓮拳

(ぐれんけん)

拳に炎のような【魔力】を乗せて殴る。

一拳

(ヒトツカ)

魔力放出を利用した強烈な拳撃。

豪拳式倍 二拳

(フタツカ)

魔力放出を利用した拳撃。

Aランク魔導師のシールドを叩き割る威力がある。

豪拳参倍 三拳

(ミツカ)

魔力放出を利用した拳から繰り出される強烈な拳撃。

校舎を大破させるほどの破壊力がある。

豪拳参倍 三拳旋

(ミツカセン)

魔力放出を利用した拳から繰り出される拳撃。

螺旋のごとく渦巻くエネルギーと共に対象を打ちぬく。

猛虎硬爬山

(もつここうはざん)

構えと共に相手に肩から押し出すような打撃を繰り出して攻撃をする。

无二打

(てんにだ)

魔力を心身に巡らせて、全身を活性化させて魔力を共鳴&増幅して、魔力によって相手を呑む。

これによって相手の感覚を幻惑させ、その状態に強烈な一撃を打ち込むことによって、相手の意識を刈り取る。

桜楼月華

(おつろうげつか)

掌に「魔力」を集め、相手の攻撃を受けながら攻撃する。

剣技

引き千切る剣

(アンチエインブレード)

脱力して静止した状態から、足先から下半身、上半身、腕といった具合に力を伝え、剣撃と共に強烈な剣圧を飛ばす技。

バインドもシールドさえも無効化させるほどの強力な技。

花散る天幕

(ロサ・イクトウス)

敵に高速で接近してオルタを振るって薔薇の花びらをまきちらしながら相手にダメージを与える

喝采は剣戟の如く

(グラディサヌス・ブラウセルン)

魔力を纏ったオルタで敵を3度、斬りつけて攻撃をする。

風王鉄槌

(ストライク・エア)

オルタを振るうと共に斜め上に向かって竜巻のごとく風を飛ばす技。

卑王鉄槌

(ヴォーディガン)

オルタを振り上げ巨大な黒い波動と共に相手を吹き飛ばす技。

破戒すべき全ての符

(ルール・ブレイカー)

あらゆる魔術を破戒する斬撃。

直接的な威力は通常魔力弾程度でしかないが、魔力で強化された物体、契約という関係、魔力によって生み出された生命といった魔術、魔法に関係するもの全てを「作られる前」の状態に戻してしまう究極の対魔法技。

刺し穿つ死刺の槍

(ゲイ・ボルク)

相手の魔法防御すら貫く一突き。

刺突をとばす事で突き穿つ死翔の槍ゲイボルクとなる。

串刺城塞

(ガズイクル・ベイ)

周囲に魔力で作成した大量の槍を展開させて敵の足元から巨大な槍を突出させて串刺しにし、さらに大量の槍が敵陣に現れ、敵の頭上に槍を落として攻撃をする技。

相手が持つ、不義や墮落の罪に応じて威力を増す、正義の一撃と呼べる代物である。

居合い

音超えの斬

(おとごえのざん)

刀身が見えないほどの超高速の居合いの斬撃。
並の使い手では、刀身どころか手すらも見えない。

葬龍 紫電・極

(そつりゆう しでん・きよく)

居合いの構えからオルタを素早く振り抜き、一瞬のうちに3連撃を
繰り出す。

アサシンの燕返しに対抗して作った技。

葬龍 紫電・滅

(そつりゆう しでん・めつ)

空中を疾走しながらすれ違い様に居合いで刀を抜いて一閃をする。

“斬龍”紫電一閃

(ざんりゆう しでんいつせん)

居合い切り、その剣速、剣圧により本気なら収束砲すら斬れる。

魔法

射撃

直射型

ガンド

北欧に伝わる呪いの魔術。

相手を人差し指で指して体調を崩す。

強力なものは「フィンの一撃」と呼び、こちらは直接的にダメージ
を与える。

瑞稀のガンド撃ちは一発一発がフィンのレベルに達している上、嵐

のような乱れ撃ち。
因みにデバイスを展開してなくても使える。

宝石魔術

凜が最も得意とする魔術。

もちろん凜の直伝。

暇さえあれば魔力を移し、強力な魔力の塊と化した宝石を魔術の弾丸として用いている。

例えば風の魔術を封じ込めた宝石は、解放すれば呪文詠唱といった手間をかけず、家の一軒や二軒軽く吹き飛ばすほどの暴風を生み出す。

因みに宝石は使い捨て。

無限の剣製

(アンリミテッドブレイドワークス)

アーチャーの宝具の再現。

アーチャー曰く「まさか使えるとは!？」と驚きを隠せなかった。

魔力で剣を作り飛ばす。

壊れた幻想【ブローケン・ファンタズム】の掛け声で爆発させる事もできる。

詠唱は士郎とアーチャーの混合である。

本人曰く2人の詠唱を聞いてごっちゃんになったらしい。

詠唱した場合は空間一式を自分の固有結界とし大量の剣を作り出すのだが剣一本一本の威力がなのはの全力全開のスターライトプレイヤーに匹敵する威力とかす。

詠唱

I am the born of my sword

(体は剣で出来ている)

steel is my body , and fire is
my blood .

(血潮は鉄で、心は硝子)

I have created over a thousand blades .

(幾たびの戦場を越えて不敗)

Unaware of loss .

(ただ一度の敗走もなく、)

Nor aware of gain .

(ただ一度の勝利もなし)

Withstood pain to create weapons ,

(担い手はここに孤り)

Nor known to Life .

(ただの一度も理解されない)

Have withstood pain to create many weapons .

(彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う)

Yet, those hands will never hold anything .

(故に、生涯に意味はなく)

My whole life was " Unlimited blade works "

(この体は、無限の剣で出来ていた)

誘導制御型

射殺す百頭

(ナインライブス)

英霊ヘラクレスがヒュドラを倒すのに用いた弓矢から発展した宝具

の再現。

元々、相手や状況によって姿を変える万能タイプの宝具。

瑞稀は対人用九連撃タイプとして使用するが本来は対幻想種用ホーミングレーザータイプ。

王の財宝

(ゲート・オブ・バビロン)

世界最古の英雄王ギルガメッシュの宝具を再現したもの。

ギルガメッシュ曰く「良くぞ、再現した」らしい。

魔力で作り出した武器を放つ魔法。

何故が追尾性能がついている。

砲撃

直射型

勝利すべき黄金の剣

(カリバーン)

失われたアーサー王の剣。

アーサー王が選定の岩から抜き、万人に王と認められたのはこの剣。

セイバーの失われた宝具の再現。

約束された勝利の剣ほどの超絶的な威力はないが、その分魔力の消耗も小さくてすむ。

なののは、

デイベインバスターと同じ威力。

誘導制御型

約束された勝利の剣・永久の闇

(エクスカリバー・モルガン)

元々はセイバーオルタの技。

オルタを空間または地面に突きたて、黒い龍の波動を飛ばして相手を何度も貫いた後、黒いエクスカリバーで相手を吹き飛ばす技。

収束型

約束された勝利の剣

(エクスカリバー)

セイバーの宝具を真似たもの。

オルタに膨大な魔力を纏わせ斬撃として放つ光の剣。

なのはの、エクセリオンバスターと同威力。

天地乖離す開闢の星

(エヌマ・エリシュ)

ギルガメッシュの宝具を真似たもの。

名前はギルガメッシュより受け継いだ。

瑞樹が、魔力をフル開放してオルタで魔力を放ち空間を切断する。

オルタから放たれた魔力斬撃が風圧の断層を作り出し、あらゆるものを粉碎してしまう。

なのはの、プラスター3の全力全開スターライトブレイカーと同威力である。

広域

黄金鹿と嵐の夜

(ゴールデンワイルドハント)

海賊フランシス・ドレイクの宝具。

スペインの無敵艦隊を破った「火船」の逸話と、ヨーロッパ全域で伝承される「嵐の夜」^{ワイルドハント}の逸話を再現した魔法で、かつて彼女が率い

た「黄金の鹿号」^{ゴールドンハインド}を中心に、無数の小船を魔力で作り出し展開して圧倒的火力を用いて敵を殲滅する。

補助

天を踏む

(エアステップ)

魔力を脚に纏い空中を蹴って移動することが可能になる。

天を跳ねる

(エアテンペスト)

魔力を足元に纏い空中を蹴って縦横無尽に飛び回り敵をかく乱する。

時を纏う聖者の泉

(トレ・フォンターネ・テンプステイス)

青い薔薇の演出と共にオルタを構えて自身の攻撃力を上昇させる技。

燃え盛る聖者の泉

(トレ・フォンターネ・アーデント)

薔薇の花びらの演出と共にオルタに爆炎を纏わせる。

傷を拭う聖者の泉

(トレ・フォンターネ・クラーティオ)

薔薇の花びらの演出と共にオルタを構えて自身の攻撃にHP吸収効果付与させる。

バインド

自己封印・暗黒神殿

(ブレイカー・ゴルゴーン)

ライダーの宝具を再現したもの。

対象に魔力を浴びせることで発動し、その意識を歓喜と禁忌の混沌渦巻く悪夢の中に取り込み、同時に外界への能力発動を封じ込める。瑞樹は自分の力をこれで封じている。バインドとして良く使う。

天の鎖

(エルキドゥ)

その能力は「神を律する」もので、捕縛した対象の神性が高ければ高いほど効果をます。

信仰心の高い聖王教会所属者にとっては最悪のバインド。

ヴィヴィオやアインハルト達のように神性のない者にはただ頑丈なだけの鎖でしかない。

防御魔法

シールド型

熾天覆う七つの円環

(ロー・アイアス)

七つの花卉の形をしたシールド魔法。

花卉の如き守りは七つあり、その一つ一つがAランク魔導師のシールドに匹敵し、射撃魔法に対しては無敵とされるシールド魔法。

この宝具はトロイア戦争において大英雄の投擲を唯一防いだ盾をモチーフにしている。

バリア型

全て遠き理想郷

(アヴァロン)

セイバーの宝具を真似たもの。

展開し自身を妖精郷に置くことで、外界からのあらゆる物理干渉を無効化する。

その防御能力は、スターライトブレイカーすら防ぎきる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2196y/>

魔法少女リリカルなのはvivid 聖杯を宿す者

2011年11月5日03時03分発行